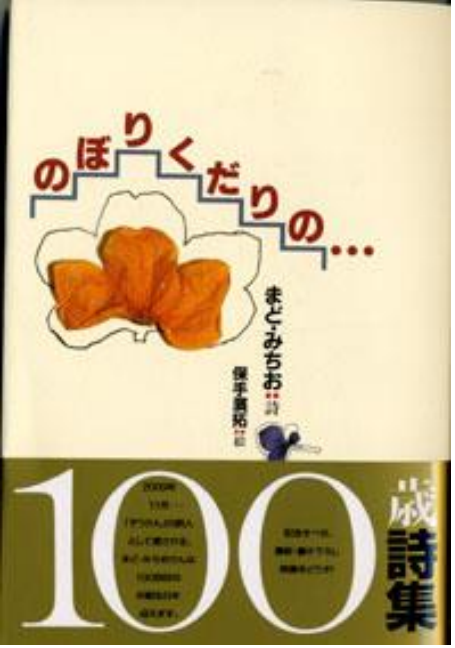
あの「ぞうさん」の詩人

まど・みつおさん
100歳詩集２冊



㊤『100歳詩集　逃げの一手』
小学舘発行　1.400円＋税
㊦『のぼりくだりの…』
理論社発行　1.300円＋税

ぞうさん　ぞうさん
おはながながいのね
そうよ
かあさんも　ながいのよ

ぞうさん　ぞうさん
だれがすきなの
あのね
かあさんが　すきなのよ

まど・みちお・詩（昭和23年）
團　伊玖磨・曲（昭和28年）

見過ごされる　まど詩」の命

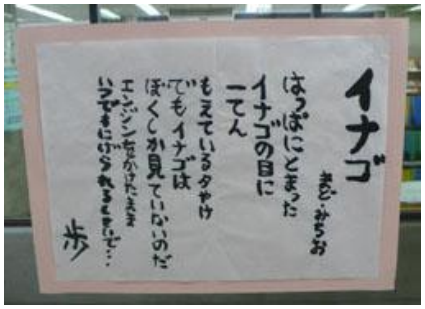
昨秋、柏市中央図書館では、まど・みつおの詩集を並べ、その詩を書いた書道展を開いた。「イナゴ」という詩を書いていた。こういう詩である。

はっぱにとまった
イナゴの目に
一てん
もえている夕やけ

でも　イナゴは
ぼくしか見ていないのだ
エンジンをかけたまま
いつでもにげられるしせいで…

ああ　強い生きものと
よわい生きもののあいだを
川のように流れる
イネのにおい！

書道少年は、この最後の4行を「見ていないのだ」。生きるものの努力、大きな自然の中で。まどさんは、この哲学を伝えたいのに、詩はちょん切られてしまう。比重は書道に片寄ってしまう。



まど・みつお　本名・石田道雄。一九〇九年、山口県徳山市（現・周南市）生まれ。「ぞうさん」など童謡を数多く発表、一九六八年、第一詩集「てんぷら　ぴりぴり」を出版、以後詩集・絵本の出版多数。一九九四年、日本人初の「国際アンデルセン賞作家賞」を受賞。

ごりっぱなアルツのハイマチャン

俺…ときたらば／まあ／よくも／ここまで／生きてきた／もんだよなあ

上の詩集の中の一節である。

そのまどさんが、「ぞうさん」を書いたとき、一日の賃金が二百四十円、インフレの時代。長男の七つの誕生祝に汽車のオモチャをせがまれた。買い物をあきらめたまどさんは、上野動物園へ連れて行く。レンガ造りのゾウ舎にまだゾウはいなかった。

「ここにね、とってもおおきなゾウがいてね」そのとき、息子がゾウに話しかけ、ゾウが応える形式の詩が浮かんだ。（朝日新聞社編　東京のうた」）

時流れて平成21年11月、まどさんは一〇〇歳になる。病院暮らしの、その誕生日に93歳の、車椅子の妻が駆けつける。NHKテレビが見せた。

日記を毎日つける。左の詩集に、「ニッキチョウ」という詩がある。

アタラシイ／ニッキチョウだ／がんばるぞと／りきんでみせても／あいては／カミさん／ただひとり／ごりょうにん／ともに／ごりっぱな／アルツの／ハイマチャン／こりゃアカンと／きづいても／もうフンづまり／ニッチも／サッチも／めでたしや！

末広クラブ・逆井漫歩141　平成22年2月①